

装置、書籍等の整理、解体、荷作りは手間と時間を食う。この段階でうまくやる事の一般的教訓は無い様に思える。それは研究室の個別的な状況が絡むからである。今後移転される方々が、自身の参考にするためには、このような駄文を読むよりも、自分の研究室と似たような研究室に直接聞くのが利口である。

梱包は嚴重に、だれも責任はとってくれない

以前の経験が生かされた部分はある。教育学部の移転の際、包装用テープの粘着力が良すぎて、はがす際に困ったとの事を、組合の座談会の席で聞いたが、そのことは改善されていた。しかし書籍用として用意されたカートンケースは腰が弱くて、積み重ねに困った。このような事は、しかし、個々の教官、職員、学生、研究室が直接準備することではない。

移転中の物品破損事故についても、これは移転業者とアルバイト作業員の質および教育の問題で一般化出来ないだろう。こちらで出来る対策は、せいぜい梱包を嚴重にするという常識的なことしかない。また作業員の作業の質も

始めと終わり頃ではかなり違っていた様である。ところで、私の机は移転のさじにかなりの塑性変形をうけ（つぶれかけたということ）、原型に回復したのは二ヶ月後であった。その位のペースで動くと言わして居たほうが良い。こんな事はしかし大した事ではない。

移転計画の段階で若い人の口出しを

重要なのは、移転後の研究教育環境に影響を与えるさまざまな決定で、それらは移転が始まるかなり以前に実質的なところが決まっております。輸送トラックが動き出す時点ではもう動かせなくなっていることである。

移転関係の諸々の委員会に出席された委員からよく聞かされた嘆きの一つに、「何か意見を述べると、それは既に決まった事に反する、と答がしばしば返り、それでは何時と問い返すと、五年とかそれ以前で、当時決めた方々にはもはや在職されていない方もある」があった。

「悪」の根元は移転が遅れる事にある。世の中は変化している。早い話が、コンピュータネットワークのためのできるだけいい環境を作っておくこと

は、今後益々重要になるにもかかわらず、その事に対する認識は五年前には充分あったとは思えない。一般に決定に当たる人々が「老人」過ぎ、充分に変化を予測できていなかった様に思える。若い人が、もっと移転諸計画に参加決定出来る様にすべきであるし、移転が遅れる場合はフイードバックが可能な体制が必要である。

「建新」の配分、個人と学科と学部

また、例の「建新費」の使用配分についてであるが、これも教育学部の場合にいろいろと聞かされ、その轍を踏まないようにと話し合っていたが、学部段階での論議、決定はその教訓を充

分に生かされなかった。パイの大きさは一定なのだから、どこかが大きく噛れば残りは小さくならざるを得ない。学部全体は今後も共同体として協力して運営していかなければならない以上、ハシタナイと他から受け取られる様な事は極力避けるべきである。乏しきをウレエズ、等しからざるをウレウと先人の言葉にもある。

研究室の設計についても、自分が永遠に使用する事を前提とした様な個別的要求があり、工事担当者をやまし、工事が手間取った向きもあったと聞いているが、これも同様に感心できる事ではない。

どうも参考になる事よりもボヤキばかりになってしまった。それにしても大学院生、学部四年生の諸君にはお世話になった。

移転を終えて

理学部物性学科 藤原 浩

東千田キャンパスと西条キャンパスとの間にヘリコプターを連絡用に飛ばすことのある程度真剣に考えた頃、始めて出席した一九八三年九月一二日の

理学部統合移転委員会と同じ年の一月二五日の物性学科移転委員会、現在の様な正式な理学部委員会の議事録が作られた一九八六年一月一七日の



1986年4月17日右側が理学部予定地

委員会と自分のなかの移転史を振り返ると長い作業のようでもあったし、逆に広大百年の大計からみれば短い産みの期間であったようにも思える。

とはいえ、理学部のトップバッターとして一九九一年八月一日の出発式を迎えた当物性学科の移転が無事終了したことは学科構成員全員の一体となつての取り組みの結果であると思うとやはり何ともいえぬ感慨をもたざるを得ない。

以下の稿を書くには学科の移転委員の方達のご意見を参考にした。ご協力にお礼を申し上げる次第である。

全員の協力が大切

(一) 先ず全ての方が教職員・学生一体となつて取り組めたことに対する感

謝と満足感を述べておられた。特に研究室配属の学生・院生諸君の献身的な働きは特筆すべきものであった。恐らくこれがなかったら各研究室の移転はできなかつたのではないかと思う。しかしお互いに納得していただければ、学生諸君の労に対して特に経済的な面で報いられたことには悔いが残る。

(二) 本部の方を含めて事務関係の方

一九九〇年七月一八日建設急ピッチ



達に対する謝意も皆さん表しておられた。連日の残業、いろいろな意見に対する対応、スケジュール調整など実際大変だったと思う。

(三) 運搬時の作業については細かいところでは一部問題もあったらしいが、運搬後の装置、機械類の立ち上げについては別に問題もなかったため、全体としては円滑に進んだものとして関係者の労をねぎらいたい。

思い込みはダメ

入念なチェックと工夫を

(四) 次ぎは反省すべきことについてである。

○やはりヒヤリングの時点やその後の再確認の時点での入念なチェックや確認が必要であった。電話の設置部屋、黒板はスチール製だと思いついていたこと、重量物運搬通路に対する補強、などがその例である。また、接地階の空調用の室外機が上の階の人を騒音で悩ましたことなどは正直のところ前以て気が付かなかつた。

○入念に作業予定を組まれていたグループでは、移動日の変更や他部屋との混載などで一部混乱されたところもあったようで、全体の流れからみての



1991年8月26日東千田キャンパス3号館よりの積み出し

止むを得ない措置ではあつたろうが、今後の参考になろう。

(五) その他の意見をいくつかあげておく。

○移転に際しての梱包に関して、基本線は別として、細かいところは各研究室で独自に工夫してやっておられたようで、或る意味で今後の移転でもそうなるのではなからうか。

○研究室が代がわりすることを考えるとあまり各部屋模様が違うように設計するのも一考を要するかもしれない。○今後は共通的な部屋が増すであろうから、手取りを減らさないためには基準面積の見直しを求めているかどうか。

以上移転を終えてのまとめみたいなものである。なお時代の流れに沿った写真を三枚のせておく。